

前方後円墳は、ヤマト王権とのつながりを示す重要な資料となるもので、福岡県内では糸島地域、福岡平野、八女地域、宗像地域に集中し、総数約 200 基とされる。うち約 40 基が宗像地域で確認されており、古墳時代における本地域の優位性がうかがえる。

■石室と壁画の概要

後円部に築かれた第 1 主体部は複室構造の両袖式横穴式石室で、墳丘主軸にほぼ直交して西側に開口する。石室の全長は 8.86m、羨道部長 5.09m、前室長 2.58m、中央部幅 1.47m、高さ 1.96m、後室長 3.88m、後室奥壁幅 2.05m、中央幅 2.29m、高さ 3.63m を測り、羨道部の一部が破壊されているがほぼ完存する。後室奥壁部分には石屋形が見られ、石柱の間隔は 1.2m、中央石棚部高 1.65m である。

奥壁及び石屋形両石柱前面、側面に千鳥状に連続した赤、緑、白に塗り分けられた三角文が描かれている。この壁画は、各石材に線刻による区画分けが行われている。現状の壁画はかなり薄れており、視認しにくい。石室は江戸期にはすでに開口されていたと考えられ、石室内には「寛文拾参年五月□日」や「昭和十三年」の釘書きがある。

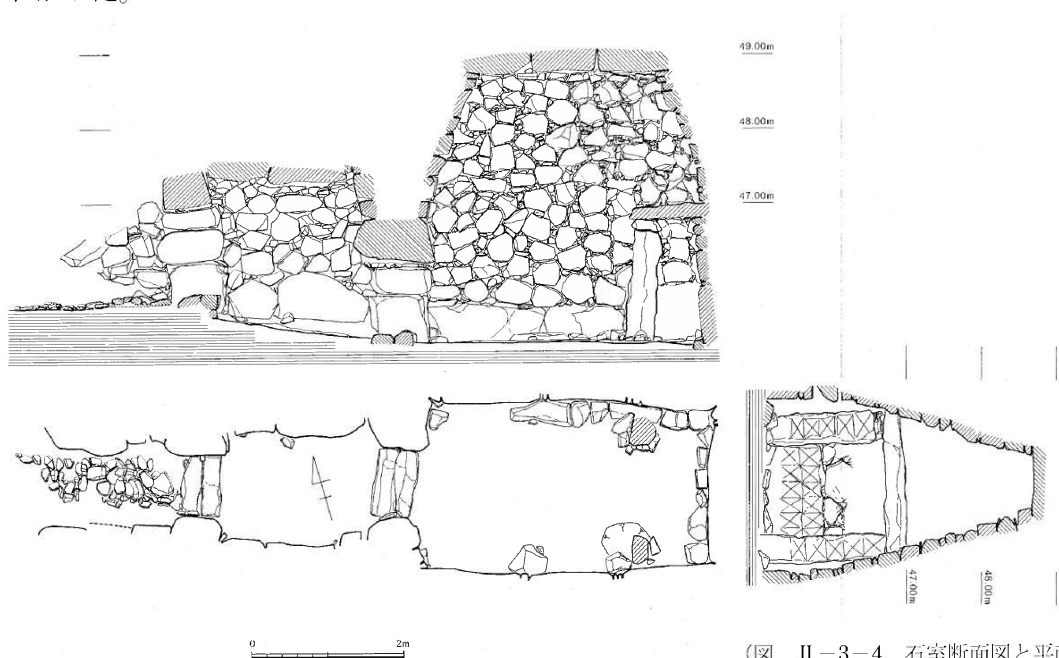
なお、装飾の顔料や色については従来、赤・緑（青）・黄色とされてきたが、平成 21 年（2009）に東京文化財研究所の協力を得て自然科学的分析を行った結果、赤色（ベンカラ）、緑（青）色は緑色（セラドナイト）、黄色とされていた部分は白色（白色粘土）であることがわかった。



(図 II-3-2 CG で鮮明にした壁画)



(図 II-3-3 CG で再現した石室の現況)



(図 II-3-4 石室断面図と平面)

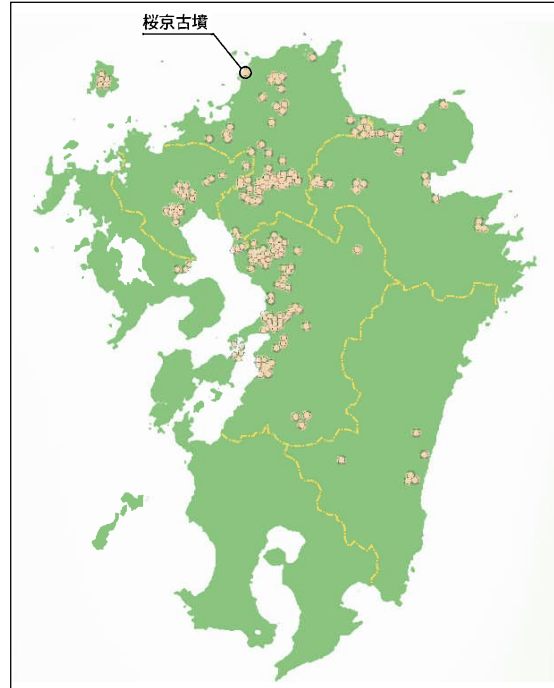
■出土遺物

古墳時代のものとして鉄鏃の茎、弓金具などの金属器、須恵器、土師器の破片などがある。5世紀代に見られる白玉も出土しているが、本古墳に伴う可能性は低いと考えられている。博打場であったためか「寛永通寶」や「洪武通寶」などの鉄銭、銅銭が含まれる。

■歴史的位置付け

装飾古墳は全国で約700基が確認されており、古代人の死生観や思想を知る上で極めて貴重な資料である。4世紀後半頃から7世紀にかけて畿内を除いた全国に偏在して営まれ、その半数以上が九州に分布する。石棺系、石障系、壁画系、横穴系の4つに分類されており、石棺への彫刻から始まり、彩色が加わりながら石障や石屋形へと広がる。壁画系は彩色が横穴式石室の壁面にまで施されており、桜京古墳は壁画系に属している。

桜京古墳の文様解釈について、一般には避邪としての三角文、あるいは連続三角文とされるが、直弧文の簡略形態と見る研究者や人類学者金関丈夫の宗像＝胸肩＝イレズミ説（宗像海人特有のイレズミを胸や肩に施していた）を援用し、ウロコ文とする考えなどある。いずれにしても宗像地域は本来装飾古墳の分布圏ではなく、石屋形や壁画には筑後・肥後地域など有明海沿岸部の影響といえる。また、近隣の装飾古墳には宮若市竹原古墳や桂川町王塚古墳などあり、石棚、石屋形という石室構造や文様構成に三角文を含んでいる点など共通要素もあり、遠賀川水系の南北ラインのなかに位置付けることもできる。このように桜京古墳の被葬者像を考えることで、古墳時代における地域社会の政治的、経済的動向を知ることができる。



(図 II-3-5 九州の装飾古墳分布)



(図 II-3-6 ムナカタ海人イメージ像)

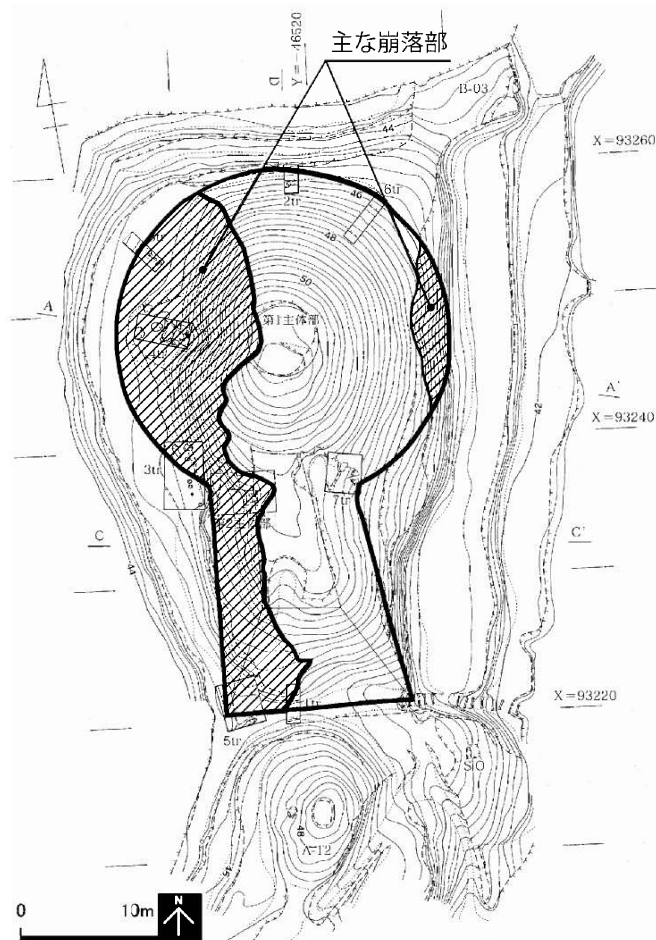
イ) 古墳の現状と課題

■墳丘

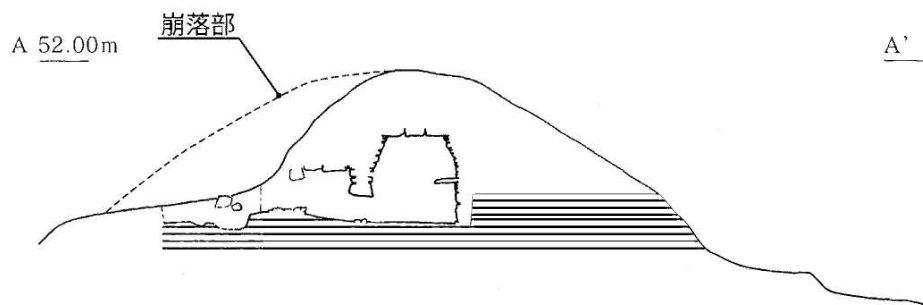
墳丘の現状は江戸期の盗掘と、北西方向から吹きつける海風により、墳丘西側が大きく崩落し、盛土の流出が続いている。また、後円部東側も開墾によって急斜面となり一部が崩れている。そのため、石室内環境の安定化とともに前方後円墳としての往時の姿を取り戻すため、墳丘復元が必要とされよう。なお、墳丘内には樹木が繁育し墳丘、石室への悪影響が懸念されるが、これについては次項で整理する。



(写真 II-14 崩壊する墳丘)、(墳丘北側から)



(図 II-3-7 主な墳丘崩落部) 出典；桜京古墳調査報告書

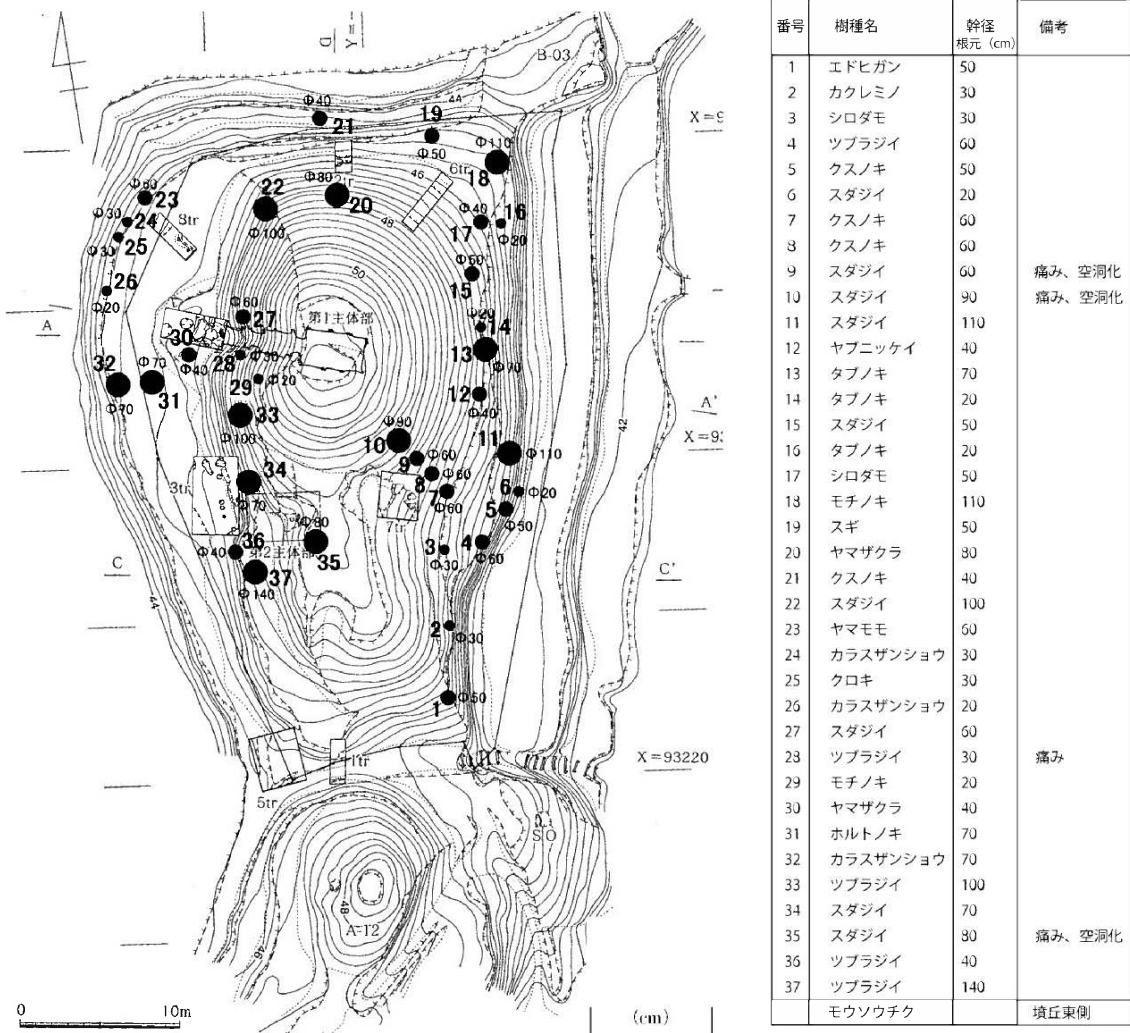


(図 II-3-8 西側が大きく崩落する墳丘)(後円部東西断面図) 出典；桜京古墳調査報告書

■墳丘上の樹木

墳丘上の樹木については、平成 23 年 (2011) 10 月に調査を行った (資料編「桜京古墳の植物概況」参照)。結果、樹種にはクスノキ・スタジイ・ツブラジイなど 300~400 年は成長を続ける長命な樹木が多く、空洞化や痛みの見られるものもあった。

樹木は成長とともに体積を増していくが、樹体を支持するために地上部の 3 分の 1 の体積が地下に存在しており、枯死した場合はそれが石室への水みち発生や墳丘陥没につながる可能性がある。また、風当たりが強い立地のため、風倒・根返りによって墳丘を傷める可能性も高い。墳丘、石室を保護するためには安易な伐採を避け、墳丘上樹木の樹勢をできるだけ抑える対策が必要とされる。

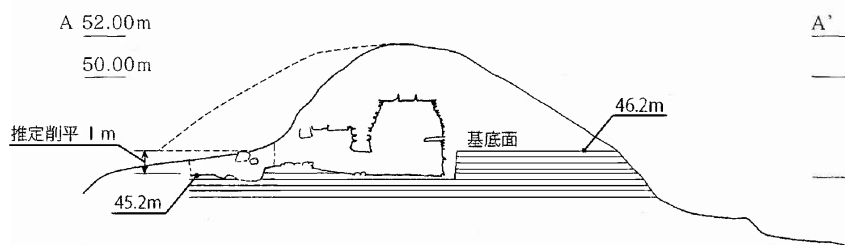


(図 II-3-9 墳丘上の樹木の配置)

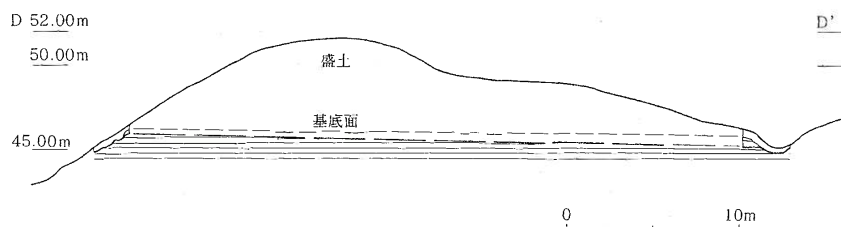
■墓道前面の遺構分布

平成 15～17 年度(2003～2005)に実施した確認調査の結果をもとに、石室保護施設の設置に関わる墓道前面の遺構分布状況について整理する。

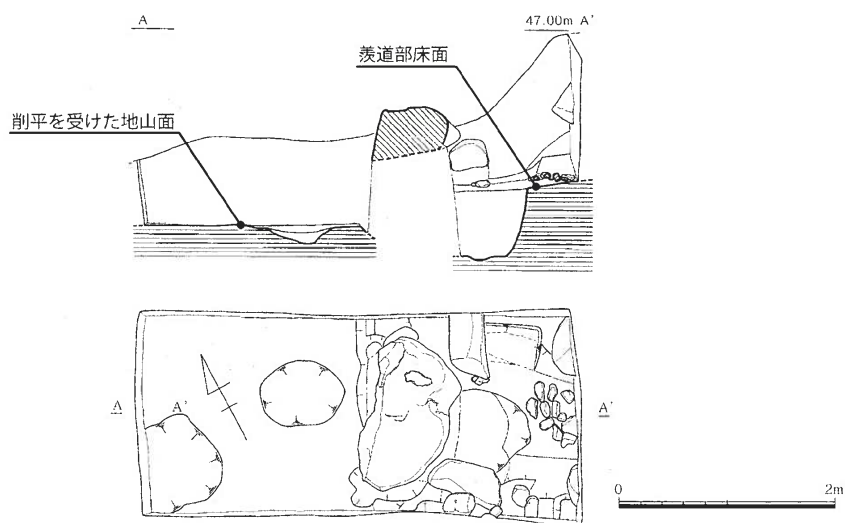
古墳の立地する丘陵は、元々北から南にかけてわずかに下っているため、築造に先駆けた地山整形を行う際、南側を若干盛土することで水平を意識した基底面を造りだしている。その標高は後円部中心付近では約 46.2m である。墓道前面の状況を確認するため設定した第 4 トレンチ床面は 45.2m を測り、約 1m の削平を受けているものと考えられる。また、同トレンチ東端で羨道部床面を標高約 45.5m に確認しているが、削平により床面から約 0.3 m 下まで断ち切られている。したがって、古墳に関わる遺構の存在する可能性は、きわめて低いものと考えられる。



(図 II-3-10 後円部基底面と墓道前面の削平状況図)



(図 II-3-11 桜京古墳の墳丘断面図)



(図 II-3-12 桜京古墳の第 4 トレンチ実測図)

■石室の内部環境

石室開口部は長らく土のう積みによる仮密閉の状態であり、石室内部の温湿度変化や生物被害等については不明であったが、平成21年(2009)より石室環境調査を東京文化財研究所の協力を得て実施した(資料編「石室内環境調査」参照)。結果、室温は12℃から18℃で一定しており、温湿度は100%と推定される。また、天井部に著しい結露がみられるが、他は乾燥しており、室内の環境は比較的健全であることがわかった。

ただし、石室内で数種類のカビとキノコが確認されており、温度変化で結露が生じると菌はいつでもカビを発生させ得ることに留意し、定期的に監視する必要がある。また、小動物の侵入を疑わせる痕跡や降水が多い日に室温の変化がみられる(表Ⅱ-10、Ⅱ-11)ことから、外界とつながる水路の存在が疑われる。よって安定した室内環境を維持するための適切な保護施設が必要である。

保護施設の検討には、石室開口部に吹きつける海風を避け、墳丘と同等の断熱性能と防水・排水に配慮した構造が求められる。



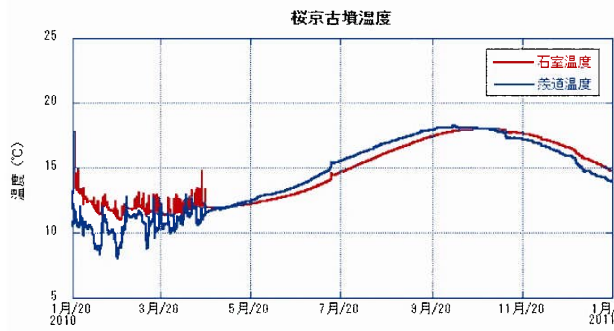
(写真Ⅱ-15 土嚢積みによる仮密閉される開口部)



(写真Ⅱ-16 玄室 壁の菌糸体)

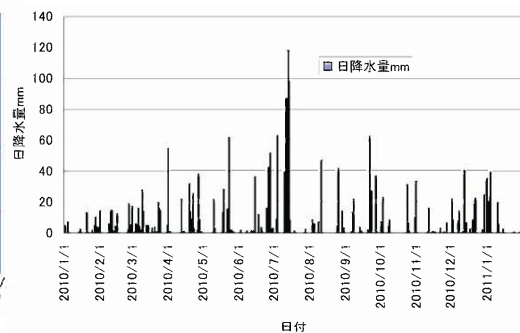
出典；石室内環境調査

— 温湿度の石室に与える影響



(表Ⅱ-10 2010年の石室内温度と羨道温度)

出典；石室内環境調査— 温湿度の石室に与える影響



(表Ⅱ-11 宗像市の日降水量)

出典；石室内環境調査— 温湿度の石室に与える影響